アジア・アフリカ地域研究 第 22-2 号　2023 年 3 月
*Asian and African Area Studies*, 22 (2): 187–220, 2023

# 狩猟採集民バカの幼児の愛着行動とマルチプル・ケアテーキング

田　中　文　菜 *

# Attachment Behavior of Infants of the Baka Hunter-Gatherers and Their Multiple Caretaking

Tanaka Ayana*

Bowlby's attachment theory holds that an infant must form an emotional bond with a primary caregiver in order to have normal emotional and social development. The issue of multiple caretaking in the community of Pygmy hunter-gatherers has given rise to controversy over this theory, which focuses on the mother-child relationship in western society, and necessitated a re-examination of the theory. This study aimed to ethnographically describe the attachment behavior of Baka infants and caretaking by their parents with people throughout the community and to characterize this attachment behavior. The analysis indicated that when the two-year-old Baka infants in this study felt fear, pain, or sickness they showed attachment behavior primarily to their mothers. On the other hand, when mothers returned after a separation or were busy with subsistence or household activities, the infants did not show distinctive attachment behaviors to their mothers, probably because of the presence of other people around them. There was always someone in close proximity to an infant who could provide substitute care properly and flexibly because subsistence activities, household activities, caretaking, and other necessities are all traditionally group activities in Baka society. Also, the two-year-old Baka infants often showed attachment behaviors to their multiple caregivers. Therefore, the attachments of those infants in particular should be seen as a sort of a network consisting of multiple attachment figures, not just the single mother-child relationship.

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科，Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University
2021 年 9 月 1 日受付，2022 年 4 月 5 日受理

## 1. 研究の背景と目的

### 1.1 愛着理論

イギリスの医師・精神分析家ボウルビィは，世界保健機関（WHO）に委託されて第二次世界大戦後の孤児を調査し，乳児期の母性的養育の剝奪が，パーソナリティの発達に及ぼす悪影響について無視しえない証拠を得た［Bowlby 1951］．この研究を経て，ボウルビィは，精神分析学，比較行動学，制御理論を統合し，愛着理論を提唱した［Bowlby 1969］．愛着理論は，現在にいたるまで，先進国における子どもの福祉・教育政策の基礎のひとつであり続けており，近年，児童虐待の増加が問題となっている中で，いっそう強い関心を引いている．

愛着についてボウルビィは次のように述べている．「ある人が誰かに愛着を持っているということは，その人物に接近と接触を求める強い傾向があることを意味している．そのように行動する傾向は，愛着を持っている人物自身の属性であり，時間が経過してもあまり変化せず，その時々の状況にも影響されない持続的な属性である．これに対して，愛着行動とは，特定の状況において，よりよく対処できると思われる人物に接近したり，接近を維持したりするためのさまざまな行動である」［Bowlby 1988: 28］．愛着理論は，ある人が特定の人物に対してもつ永続的な愛着と，状況に応じて出現したり消失したりする愛着行動の両方を対象とし，愛着という概念は，愛着行動の記述や分析をとおして把握される［Bowlby 1988］．ボウルビィは，子どもの愛着行動のパターンとして以下の a ～ f を挙げている［Bowlby 1969: 268］．

(a) 歓迎を含め母親との相互作用を開始する行動：接近する，触れる，抱きしめる，母親の上によじ登る，母親の膝に顔を埋める，呼びかける，話す，両手を挙げる，微笑するなど．
(b) 母親が率先して始める相互作用に反応し，相互作用を維持する行動：上述した行動に加えて，母親を注視することを含む．
(c) 離別を避けようとする行動：後を追う，しがみつく，泣き叫ぶなど．
(d) 母親との苦痛に満ちた離別の後に母親と再会する場面での行動：歓迎反応のみならず，回避，拒否および愛憎並存反応を含む．
(e) 探索行動：母親の存在を確認しようとすることと，環境内の事物への注意の持続．
(f) 引き下がる（恐怖）行動：母親の存在を確認しようとする．

さらに，a ～ f の子どもの行動が観察されるときには，確認すべき状況として次の A ～ D を挙げている［Bowlby 1969: 268–269］．

(A) 母親の所在と動き：母親の存在・外出・不在・帰宅

（B）他者：見慣れた人の存在・不在，見知らぬ人の存在・不在
（C）人間以外の状況：見慣れているところ，見慣れないところ，全く知らないところ
（D）子どもの状態：健康や病気・苦痛，元気や疲労，空腹や満腹

ボウルビィの弟子であり同僚であったアメリカの発達心理学者エインズワースは，乳幼児の愛着の質を測定するためにストレンジ・シチュエーション法（以下 SSP）を考案した．まず，母親が乳幼児と一緒に見知らぬ部屋に入り，見知らぬ人物に乳幼児を託して退出し，しばらくしてまた戻ってくる，という実験を行なう．そして，母親との分離場面と再会場面における乳幼児の行動を観察し，愛着の質を分類する，というものである［Ainsworth *et al.* 1978］．SSP は世界各国で使われるようになったが，ドイツ［e.g. Grossmann *et al.* 1985］，イスラエル［e.g. Sagi *et al.* 1985］，日本［e.g. Takahashi 1986］で，それぞれの分類に振り分けられる乳幼児の割合がアメリカと異なっていた．それを踏まえ，育児パターン，特に母親の出入りの頻度，母親との分離の長さ，乳幼児の見知らぬ人への慣れなどにおける文化間の差異が SSP の結果に影響を与えるのだろうと解釈された［LeVine and Miller 1990; Quinn and Mageo eds. 2013］．

その後，人類学者や文化心理学者によって，愛着研究において文化的・生態的文脈を考慮することの重要性が主張されるようになってきた［e.g. Harwood *et al.* 1995; LeVine and Norman 2001; Rogoff 2003; Keller 2007, 2013; Quinn and Mageo eds. 2013; Otto and Keller eds. 2014; Keller and Bard eds. 2017］．たとえば，複数の養育者たちによるケアは地域によってさまざまなやり方をとり，それらに伴う乳幼児の愛着も地域によって多様であることが報告されている[1)]［e.g. Otto and Keller eds. 2014］．ガスキンらは，文化的・生態的文脈を踏まえて愛着研究を進める際に考慮すべき項目として，養育者の子育てに関する信念や価値観，ケアの慣習などを挙げている［Gaskins *et al.* 2017］．

2016 年にドイツで開催された学際的なフォーラム（第 22 回 Ernst Strüngmann Forum）で，愛着がテーマとしてとり上げられ，文化心理学者，文化人類学者，霊長類学者，進化生物学者，愛着理論家，発達心理学者，神経科学者たちが愛着について話し合った．その成果をとりまとめた *The Cultural Nature of Attachment*［Keller and Bard eds. 2017］の中で，愛着研究を主導する世界各地の 10 人の研究者たちが，今後の研究の方向性に関わる 3 つの問いを提示し，

1）たとえば，ブラジルの狩猟採集民ピダハン（*Pirahã*）の母親は，他の子どもにも授乳し，子どもは発達段階により，母親，両親，家族，村，ピダハンの人々など，さまざまな集団に愛着を抱くことが示唆された［Everett 2014］．コートジボワールの農耕民ベング（*Beng*）の母親は，主たる養育者となる期間が短く，その後は他の養育者が補完・代替する［Gottlieb 2014］．カメルーンの農耕民ンソ（*Nso*）の母親は，必ずしも主たる養育者となるわけではない．子どもたちの大半は，複数の養育者が世話をしやすいのが「良い子」という文化的概念に沿って，見知らぬ人との出会いに恐怖心を示さない［Otto 2014］．

見解を述べている［Morelli *et al.* 2017］.

ひとつ目の問いは，子どもが形成する愛着に順位をつけなければならないのか，である．モレリらは，そうは考えていないと述べている．子どもの関係性のネットワークと，そのネットワークの中での人々の役割と責任が，子どもの人生において重要な役割を果たす．極端な場合として，主にひとりの人（通常は実母）がケアをしている子どもはその人を強く好み，多くの人が役割と責任を分担してケアをしている子どもはその人たちを強く好むかもしれない.

2 つ目の問いは，愛着は 2 者間だけの調整システムに帰結するのか，である．モレリらは，そうは考えていないと述べている．子どもの愛着のネットワークは広く，関与する人は多く，そして複数人が同時に子どもに接触していることを勘案すると，子どもが他者との関係を調整する過程には 2 者だけでなく多くの人が同時に関与しているはずである．おそらく，そのような事態は，子どもの愛着形成に十分に影響するだけの頻度で生じている.

3 つ目の問いは，子どもの信頼や安心感の対象は，養育者を超えて集団全体におよびうるか，である．モレリらは，そう考えていると述べている．子どもが集団内の多くの人と信頼関係を築いたならば，集団内にいるよくは知らないけれども接触を試みてみたい人々にまで信頼の対象を広げることができる．つまり，複数人への愛着は，個々人への独立した愛着の寄せ集めとしてではなく，周囲の人々の統合されたネットワークの中で経験されるのではないか.

モレリらはこれらの問いに対して現時点における見解を上のように述べてはいるものの，いまだ定説として確立しているとはいえない．これらの問いにとり組むうえで重要なことは，子どもの人間関係の多様なネットワークに参与しながら愛着行動を観察すること，すなわち民族誌的アプローチによる愛着研究である［e.g. Morelli *et al.* 2017］.

### 1.2　アフリカ狩猟採集民を対象としたケアと愛着研究

人類は，その進化史の大半において，野生動植物の狩猟と採集によって食物を得てきた．それゆえ狩猟採集民研究は，人類進化史や人間社会の原型の解明に繋がる知見を得られる可能性があるといわれてきた．ただし，近年まで存続してきた狩猟採集民は世界各地のさまざまな環境の中で生活を営んでおり，一概に狩猟採集民といっても，その多様性は大きい．したがって，少数の狩猟採集民の事例をもとに人間社会の原型について議論する際には，慎重に考察を進める必要がある．それは愛着理論においても同様である.

南部アフリカのカラハリ砂漠に住む狩猟採集民ブッシュマンの 1 グループ，ジュホアンの乳幼児は，欧米と比べて，母親との密着時間が長く，授乳の頻度が高く，離乳が遅く，母親と安定した愛着を形成する傾向があることが示された［Konner 1977］．ジュホアンの子育てにみられる母子の親密性がヒトの種としての養育行動を特徴づけているという考えは，ボウルビィが愛着理論を構想する際に重要な役割を果たした.

しかしその後，中部アフリカの熱帯雨林に住む狩猟採集民ピグミーの子育ての研究が進展

し，乳幼児が愛着を形成する対象者は複数いてよいのではないか，と考えられるようになってきた.「ピグミー」と総称される複数のエスニック・グループには，コンゴ民主共和国北東部のエフェとムブティ，中央アフリカ共和国南部・コンゴ共和国北部のアカ，そしてカメルーン東部・ガボン北東部・コンゴ共和国北西部のバカなどがある.

トロニックらが，エフェ・ピグミーを対象として，生後 3 週目の乳児 7 人を 2 時間，生後 7 週目の乳児 8 人を 2 時間，生後 18 週目の乳児 9 人を 4 時間観察したところ，母親以外の人と身体的に接触している時間の割合は，生後 3 週目の乳児では 39％であったのに対して，生後 18 週目の乳児では 60％に増加していた［Tronick *et al.* 1987］．また，生後 18 週目の乳児では 1 時間あたり平均 8.3 回の頻度で，ケアをする人が入れ替わっていた．授乳者をみると，生後 3 週目の乳児 7 人のうち 5 人，生後 7 週目の乳児 8 人のうち 2 人，生後 18 週目の乳児 9 人のうち 6 人で，母親以外の女性から授乳されていた．これらの結果から，母親以外の多くの人が乳児の養育に関与するマルチプル・ケアテーキング（multiple caretaking）[2] がエフェの子育ての特徴であると結論づけられた．さらに，トロニックらは，密に接する養育者が多くなることで乳児は個々に異なる養育者のケアの仕方に対応しなければならず，それゆえ乳児の社会的スキルの発達が促されるのではないかと述べている．また，エフェにおけるマルチプル・ケアテーキングは，文化的に適切な相互行為の様式を乳児に教えると同時に，協力，相互支援，集団性といった文化的価値観を乳児に体験させる機能を果たす可能性があると指摘している.

さらに，ヒューレットによって，アカ・ピグミーの場合も複数の人が乳幼児のケアに関わっていること，またアカに顕著な特徴として父親が積極的に関与していることが明らかにされた［Hewlett 1991a］．父親の関与が大きい背景として，ヒューレットは，アカの狩猟方法の特徴があるのではないかと推測している．アカの網猟（長い網を大きな円状に張って囲い，その中にいる動物を追いたてて捕える狩猟）には男女がともに参加し，夫婦がともにいる時間が長く，お互いに協力するため，父親の育児参加が多くなるのではないか，というわけである.

バカ・ピグミーの乳幼児と養育者を対象にした研究はほとんどないが，例外的に平澤綾子と山内太郎の研究がある．平澤は，乳児 23 人を対象として養育者との関係を記録して，母親が乳児の最近接個体となっていた時間は 1 日のうち平均 59.3％にすぎず，マルチプル・ケアテー

2）母親が他者から実質的な援助を受ける状況について，狩猟採集社会のエスノグラファーは “multiple” caretaking という言葉を用い，農耕・牧畜社会のエスノグラファーは “polymatric” childcare という言葉を用いる［Hewlett 1991b］．また，狩猟採集民研究の中には，人類学者・霊長類学者ハーディーの研究に依拠した cooperative breeding という言葉を用いるものもある［e.g. Meehan and Hawks 2013］．ハーディー［Hrdy 2005, 2007］は，ヒトに複数の養育者がいる理由について進化的視点から「協力的養育仮説（cooperative breeding hypothesis）」を提唱した．成熟が遅く，子育ての負担が大きいという特徴をもつヒトの子どもでは，アロマザー（母親以外の養育者たち）の援助があることで，母親が短い出産間隔で次の子どもを産むことができ，また複数の子どもを同時に育てることができるようになった．そして，ヒトは集団を大きくすることができ，分布を大きく広げることに繋がったと言われる.

キングがなされていることを示した［Hirasawa 2005］．あわせて，バカの乳児と養育者との相互行為を観察して，乳児の欲求と自発性にゆだねられた授乳，高頻度の授乳と乳児の短い吸啜，乳児に身体接触を伴う刺激を頻繁に与えること，乳児との近接性が高いことを見出した［Hirasawa 2005］．これらの特徴はアカ・ピグミーの研究をもとにヒューレットらが提示した狩猟採集民の乳幼児のケアのパターン（forager pattern of infant care）［Hewlett *et al.* 1998, 2000］とおおむね一致する．平澤が観察したバカ独自の特徴としては，乳児期後期において抱かれる時間が短くなる，離乳が早い，年長児が養育者として重要な役割を担っている，という点であった［Hirasawa 2005］．山内［2022］は，バカの乳児 5 人を対象とし，乳児 1 人あたりの母親以外の養育者が平均 15.8 人／日であったことを示した．これは，エフェの例（平均 11 人／日［Ivey 2000］）を上回る値である．あわせて山内は，バカの特徴として，女子が育児に大きく貢献していることを指摘している．

コナーは，自身の収集したジュホアンのデータに基づいて狩猟採集民の子育ての特徴の一般化を試み，HGC モデル（hunter-gatherer childhood model）を考案した［Konner 2005］．しかし，そこで提示した特徴のうち，2 歳までは母親以外のケアが母親よりも少ないこと，3 歳以降に離乳し 4 年の出産間隔があること，生計活動や養育に対する子どもの責任は最小限であることなどは他の狩猟採集民に一般化できないとした．そして，それらの特徴を環境への適応によって説明する CFA モデル（childhood as facultative adaptation model）を，HGC モデルを補完するモデルとして提案した．狩猟採集民として共通の特徴がありつつも，環境条件の差異に応じて子育てに多様性が生じる，というわけである．

ここまで述べてきた狩猟採集民を対象とする研究においては，おおむね愛着行動やケアを量的に記述して分析するものが多かった．たとえば，アカ・ピグミーの愛着についての研究では，アカの母親は乳幼児の主要な愛着対象者であり，乳幼児は平均 5.1 人の養育者に対しても愛着行動を示していた，といった分析がなされている［Meehan and Hawks 2014］．こうした量的研究によりアカには複数の愛着対象者がいることが明らかになったのだが，量的研究のみによっては描ききれない部分が残る．アカのキャンプには平均 29.1 人が滞在しており，乳幼児と関わる人は平均 22.0 人で，その中で上述のように乳幼児が愛着行動を示したのは平均 5.1 人であった．つまり，アカの乳幼児は必ずしもキャンプにいる人々全員に同じように愛着行動を示しているわけではない．であれば，乳幼児はどのような状況のときに誰に愛着行動を示すのかという疑問が湧いてくる．

こういった量的研究では漏れ落ちてしまう部分にアプローチするには，乳幼児の愛着行動と養育者たちによるケアの具体例を記述したうえで，愛着行動とケアの関係について考察することが必要である．バカ・ピグミーについては，養育者たちによるケアに関する先行研究はあるものの，愛着理論と関連づけた考察はほとんど行なわれていない．そこで本論文では，参与観

察を軸にすえたフィールドワークをもとに，バカ・ピグミーの幼児たちが，どのような状況において，誰に，どのような愛着行動を示すのか，またどのような状況において，誰から，どのようなケア[3] を受けているのかについて，とりわけ複数の人々が関与する場合に注目しながら記述する．

## 2. 調査対象と調査方法

バカの人口は 2 万 5000 人あるいは 3 ～ 4 万人と推定される［Hewlett 1996; Joiris 1998］．カメルーン東南部では，1950 年代にフランス委任統治政府によって，また 1960 年の独立後にはカメルーン政府によって定住化政策が進められた．現在，バカは自動車道路沿いに点在する農耕民の村落の近くに集落を形成し，半定住的・半遊動的な生活を送っている［Joiris 1998］．バカは，それぞれの土地の農耕民との間に一定の緊張関係をはらみつつも，物資の交換や労働力の提供をとおして経済的な相互依存関係を築いている．バカは，定住化とともに農耕に従事するようになり，日々の食料資源として農産物の消費割合が高くなっている［服部 2004］．しかし，1 年のうち数ヵ月間，森でキャンプ生活をし，狩猟採集活動を営む人も多く，特に野生獣肉は主要なたんぱく源として重要である［Yasuoka 2006］．男性は主に罠で狩猟を行なう．女性は林産物の採集を行ない，自分の畑でバナナなどを収穫し，農耕民の畑で働くこともある．

調査地はカメルーン東南部，G 村の一集落，L 集落である．2017 年 9 月～ 12 月，2019 年 12 月～ 2020 年 3 月，[4] 筆者は L 集落に住む調査対象児の家族とともに，村に滞在したり，森を移動しながらキャンプ生活を行なったりを繰り返した．L 集落のバカは血縁関係や婚姻関係で繋がっており，主に父系で集まって住んでいる．その人口は 2017 年時点で 126 人，内訳は成人男性 30 人，成人女性 33 人，乳幼児から結婚前までの子どもが 63 人であった．L 集落にバカの長はいるが，行政的に認知されている村長は，L 集落から歩いて 1 時間ほどの G 村本村にいる農耕民コナベンベの男性である．L 集落からは 15 人の子どもが本村にある小学校に通学していた．しかし，学齢期に達しているにもかかわらず通学しない子どもも複数名いた．子どもたちは，子ども同士，あるいは大人と一緒に森に出かけて狩猟採集をしたり，掻い出し漁（川をせき止めて水を掻い出し，魚をつかみとる漁）をしたり，畑で除草や作物の収穫をしたりしていた．また，子どもの性別・年齢に応じて家事をしており，調理する，モングル

3）ケンブリッジ英英辞典［Cambridge Dictionary］を見ると，「care」は「誰かや何かを保護し，その人や物が必要とするものを提供する過程」と書かれている．本論文では，母親，周囲の大人，年長児が，乳幼児に対して行なう生命の保護，成長・発達の促進，成育環境の整備，愛情表現などの援助や関わりを「ケア」とみなした．

4）他集落や他村のバカを訪問し，泊まり込みで調査をすることもあったため，調査期間の全日数を調査対象児と過ごしたわけではない．

（*móngulu*，クズウコン科の植物の葉で覆った半球形の家）を作る，箒で家の前を掃く，家の前に干しているカカオやキャッサバを鶏から守り夕方にそれらを集めるといった作業をしていた．

2017 年に調査した家族の家系図を図 1 に，2019 ～ 2020 年の調査時のものを図 2 に示す．以下では図 1 の家系図に準拠して，調査地に住む人々を，核家族を単位として家族 A ～ F と言及する．各人を識別するため，家族記号の後に，男性は♂，女性は♀をつけ，子どもにはその家族の中で年長から順に 1，2，3，…と番号をふった．大人には番号はつけていない．たとえば C♀は家族 C の母親，C1♀(14) は家族 C の第一子の女児である．（　）カッコ内には観察時の年齢を記した（同一人物であっても観察の時期によって別の数字になる）．バカは生年月日を記憶していないため，年齢は両親からの聞きとりをもとにキョウダイやイトコたちとの年齢差を勘案しながら推定した．

図 1 にあるように，家族 A ～ F の夫ないし妻は，同じ父母を共有するキョウダイである．長男の家族 A は，村の外れの畑に住んでいることが多かったため調査対象から外した．次男の家族 B は三男の家族 C と道路をはさんで向いに住んでいる．C♂は L 集落の長である．2017 年には，C♂，C♀，C1♀，C2♂，C3♀，C4♂，C5♀，C6♂，C7♂の 9 人が一緒に住んでいた（図 3）．C1♀，C2♂，C3♀，C4♂は小学校に通っていた．2019 年の調査時には C8♀が生まれていた．四男の家族 D は，家族 C の隣に住み，子どもはいない．五男の家族 E は，両親の隣に住み，2017 年には幼児 E1♂がいた．その後，E2♀が 2017 年 11 月に生まれ，E3♀

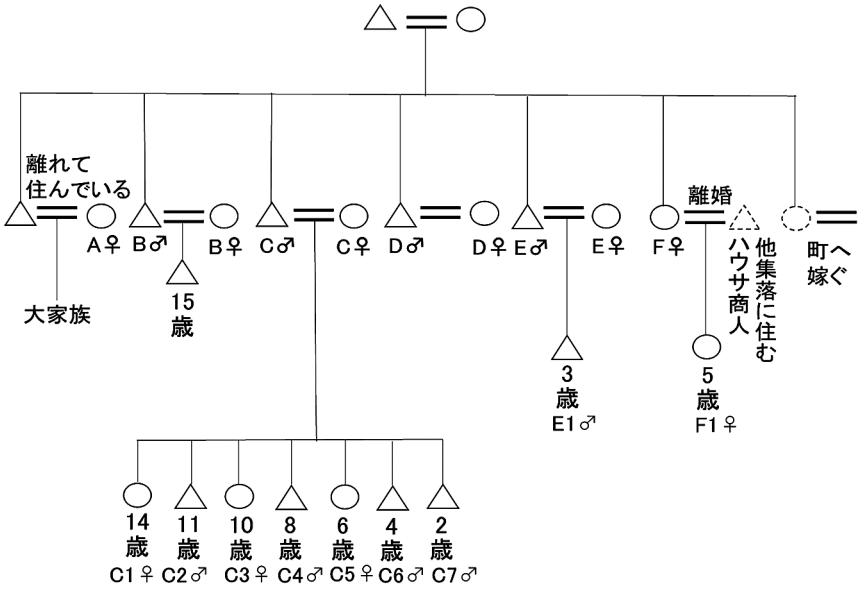


**図 1　2017 年調査の家系図**

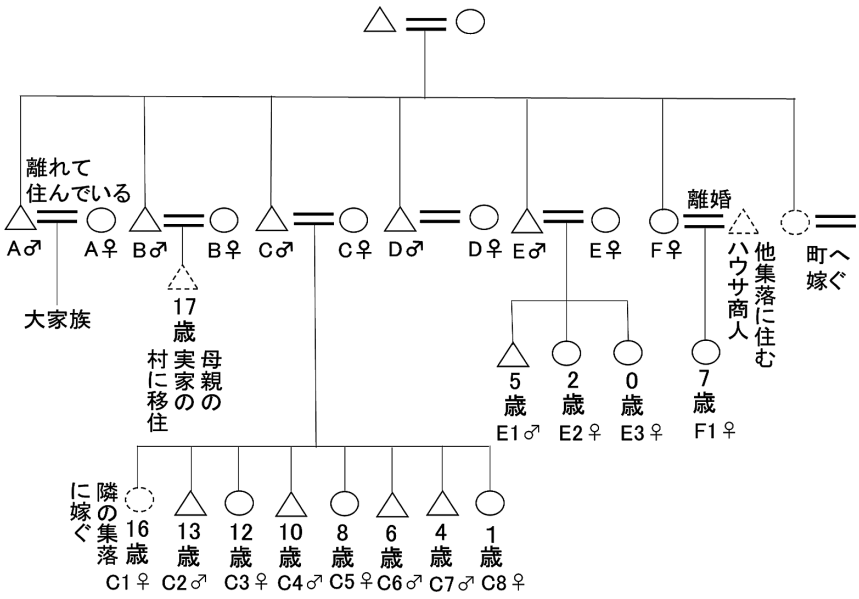


図 2　2019 ～ 2020 年調査の家系図

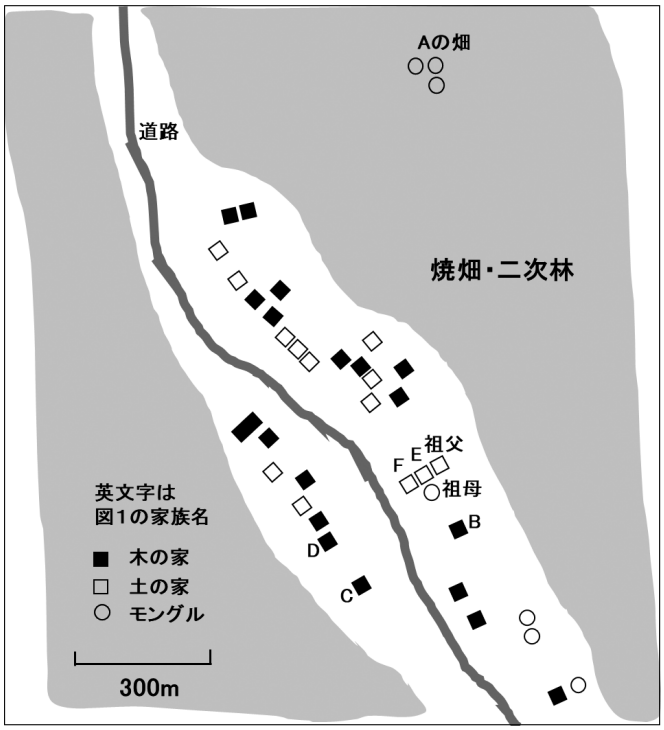


図 3　L 集落の地図（2017 年）

が 2019 年 12 月に生まれた．なお，E♀は C♀の妹である．F♀は，A♂の妹で，家族 E の隣に住み，2017 年には幼児 F1♀がいた．A♂～F♀の両親は L 集落を作って暮らし始めた人たちのひとりであり，家族 E の隣に住んでいる．

2017 年の調査では 2 歳前半の男児 C7♂を，2019～2020 年の調査では 2 歳前半の女児 E2♀を主な観察対象とした．ボウルビィ［Bowlby 1969］は人間の乳幼児において愛着行動が発達する過程を 4 段階[5] に分けており，2 歳前半児は第 3 段階に相当する．第 3 段階は，外出する母親を追う，帰宅した母親を迎える，探索行動のためのよりどころとして母親を利用するなど，弁別された人物に接近するようになり反応の種類が広がる時期である．探索行動とは，乳幼児が安心しているときに，母親の元から離れて周囲を探索したり，他の人と触れ合おうとしたりする行動を指す．そのとき乳幼児は，時折，母親の元に戻ったり，ちらっと母親を見たりする．そして，何かに怯えたり不安を感じたりすると，母親の元に戻り，しがみつく．このとき，母親は乳幼児が安心して探索を行なうことのできる「安全基地」となっている［Ainsworth 1967］．以上から，乳幼児の愛着行動と養育者たちのケアの具体例を得るうえで，2 歳前半児が適していると考えられる．また，2 歳前半児の愛着行動をこれまでの生育過程と関連づけて考察するために，C 家，E 家の他の乳幼児の愛着行動と彼ら／彼女らに対するケアも記録した．なお，本論文では 1 歳未満を「乳児」，1 歳から 6 歳を「幼児」と記載した．[6] 筆者は主に C 家と寝食をともにした．村と森で乳幼児の家族の生業活動や家事に参加しながら，乳幼児ひとりを決めて起床から就寝まで追跡し，乳幼児と乳幼児に関わる人の行動を観察し，ノートに記録した．C 家と E 家の 3 歳までの乳幼児に関する記録の中から，本報告では，バカの幼児の愛着行動と周囲の人のケアの特徴を表していると判断したものを抽出した．事例を記録した時期に幅があるため，事例の末尾にノート番号，頁，観察年月日，観察場所を記した．

親族関係の表記は，原則として日本語の体系に基づいている．バカ語では，自分と同性で年長のキョウダイはベバレ（*ngbébá-lè*），年少のキョウダイはタディレ（*tàdi-lè*），自分と異性のキョウダイは年長年少にかかわらずラニュアレ（*là-nyúa-lè*，母親の子ども）となる．父親の兄弟は父親と，母親の姉妹は母親と同じ名称になり，それぞれの子どもとの関係についても実のキョウダイと同じ名称が当てられる．一方で，母親の兄弟はティタレ（*tità-lè*），父親の姉妹はカアレ（*kàa-lè*）となる．本論文ではこれらバカ語の親族体系を用いて記述することも可能ではあるが，図 1，2 に示したように各個人の親族関係を同定してあるので，煩雑さを避けるために日本語の親族用語を用いてそれぞれの関係を記述することにした．

5）第 1 段階は弁別を伴わない人への定位と発信，第 2 段階は弁別された人への定位と発信，第 3 段階は弁別された人への接近の維持，第 4 段階は弁別された人の行動や感情への洞察による協調性の基礎の形成が起こる［Bowlby 1969］．

6）乳幼児の年齢区分は日本の児童福祉法と医療法を参考とした．

## 3．バカの幼児の愛着行動と養育者によるケア

愛着はボウルビィらによって提唱され，検討されてきた専門的概念であり，主に乳幼児が特定の養育者との間に形成する強い感情的な結びつきのことを指す．ケアは世話や配慮，気配りなどを意味する英語の日常的概念に由来し，日常会話でも幅広い文脈で用いる．したがって，愛着とケアは関連しているが，その内容や用いられる文脈が異なる概念である．また，ケアを受けた幼児が必ずしもケアの提供者に愛着行動を示すわけではなく，愛着行動を示した幼児にその対象者が必ずしもケアをするわけではない．そこで本節では，母親，周囲の大人，年長児それぞれと乳幼児との関係において，愛着とケアの内容やそれが行なわれた文脈を記述し，さらに愛着とケアの関わりについて分析を行なう．

愛着行動は地域や状況によって異なるが，基準なく愛着行動を判断するのは難しい．そこで幼児の養育者に対する行動が愛着行動であるかどうかは，1.1 で提示したボウルビィ［Bowlby 1969］の愛着行動のパターンに照らして，幼児の表情や感情，文脈を踏まえて判断した．なお，上述したボウルビィの愛着行動のパターンの説明では愛着の対象は「母親」と記されているが，周囲の大人や年長児についても同じ基準にて判断した．以下に記した事例の中で，愛着行動と判断した行動には下線を引いてある．

### 3.1　母親との関係

#### 3.1.1　愛着行動

バカ語では実の母親とその姉妹（オバ）はともに「ニュアレ（*nyúa-le*）」と呼ばれる．子どもが彼女らを呼ぶときには「ナナ（*nàna*）」あるいは「ママ（*mama*）」という．本節では，バカ語における「ニュアレ」ではなく，実の母親への愛着行動について記述する．

乳幼児は，怖い思いをしたり，疲れ切ったり，病気になったりしたときに，愛着行動が顕著になり，愛着対象から慰められたり，世話されたりすることで，気持ちが落ち着く［Bowlby 1988］．そこで，まず幼児がこういった負の感情をもつときの愛着行動について述べる．

【事例 1】転んで泣いた後，母親のそばに行き泣き止む

C7♂(2) が転んで泣き出した．近くにいた C2♂(11) がすぐに C7♂(2) のもとに駆け寄り，C7♂(2) をひっぱり起こしたが泣き止まなかった．C2♂(11) はござを編んでいる C♀ のそばに C7♂(2) を連れて行った．<u>C7♂(2) は C♀ のそばに座らされると泣き止んだ</u>．その後，C3♀(10) が C7♂(2) を抱き上げ，2 人は遊んだ．（ノート 2，75 頁，2017.9.21，村）

母親のそばに行くとすぐに泣き止んだことで，母親が C7♂(2) の「安全基地」となっていることがわかる．兄も母親のそばに弟を連れて行くと泣き止むことを知っており，意図してそう

したようにみえた．C7♂(2) は，体調が悪いときや，喧嘩をして気持ちが落ち着かないなど心身の不調の際は，父親や兄姉や周囲の大人ではなく，母親を呼び，母親に接触すると静かになっていた．他にも，泣いているバカの 0 歳児が母親に渡されたとたん，乳を吸うわけでもないのに泣き止む例が観察された．これは 0 歳児が母親に密着して安心したからであろう．

次の事例は，幼児が落ち着いているときの行動である．

【事例 2】母親のそばにいる

C3♀(10) が話しながらキャッサバの皮をむき，E♀ が生のキャッサバを食べながら，E2♀(0) に授乳していた．そこから少し離れたところで，C7♂(2) は C♀ のすぐそばに居続けた．C♀ が鍋にキャッサバを入れて洗い，キャッサバを擦り始めると，C7♂(2) も鍋に手を伸ばし，キャッサバを洗った．そこへ F1♀(5)，C5♀(6)，村の少女たちが来て，C7♂(2) らを囲み，その様子を見ていた．（ノート 5，11 頁，2017.11.28，村）

C7♂(2) は，年長児たちやオバのところではなく，母親に近接していた．母親の存在を意識しながら，キャッサバを洗うというふだんしない慣れない行為に挑戦することは，一種の探索行動といえる．このように C7♂(2) がふだんしないことに挑戦するときには，他の人ではなく母親が C7♂(2) の「安全基地」となることが多かった．

**3.1.2　ケア**

母親は，授乳する，食事を与える，ウンチをふく，添い寝をする，入浴をさせる，着替えさせる，薬を与える，運搬する，泣き止ませるなど，主に乳幼児に直接的に触れる身の回りの世話をしていた．このように，母親によるケアは，さまざまな地域・民族においてもみられるものを多く含んでいた．乳幼児の離乳の時期には個人差がみられた．C7♂(2) はまだ離乳していなかった．妹がいる E2♀(2) は完全に離乳していた．C8♀(1) は妹弟はおらず，母親も妊娠していなかったが完全に離乳していた．

【事例 3】幼児が病気のとき，薬を与えて，呼びかけに応じる

C7♂(2) が風邪をこじらせていた．C♂ が薬を探しに行き，その薬を C♀ が煎じて飲ませた．その後，C♂ は C7♂(2) のために G 村の他集落に住む親戚のンガンガ（呪医）を呼びに行った．さらに C♂ は，栄養があるといって畑からパパイヤをとってきて C♀ に渡し，C♀ が皮をむいて切ってそれを C7♂(2) に与えた．その 6 日後，C7♂(2) は，両親および兄姉と同じ部屋のござの上で寝ていた．体調が回復しない C7♂(2) は，夜中に目を覚まし，「ママ」と叫んだ．C♀ が C7♂(2) の身体を自分の方へ引き寄せた．C7♂(2) は C♀ の腕に抱かれると静かになった．（ノート 3，42 頁，2017.10.17；48 頁，2017.10.23，村）

父親はパパイヤをとってきたが，パパイヤを母親に渡し，母親が C7♂(2) に食べさせたことから，幼児が病気のときには母親が幼児の身の回りの世話をするものだと考えているようである．一方，幼児も，病気という非日常の出来事に遭遇したときは，特に母親を求め，母親がそれに応じると落ち着いた．

#### 3.1.3　愛着行動とケア

バカには複数の養育者がいるといわれている［Hirasawa 2005；山内 2022］．その中でも母親は，2 歳前半児にとって主たるケアの担い手で，最も身の回りの世話をしてくれる人であり，幼児にとって主な愛着行動の対象者であった．最も幼児の身近にいる母親は，幼児が求めたときに幼児の要求を敏感に察して応じ，それらの相互行為の経験が積み重なり，幼児にとって母親が卓越した愛着行動の対象になっていると考えられる．周囲の人は幼児が泣き止まないとき，母子が密着できるよう支援しており，母親が幼児の主な愛着対象者であることを認識している．さらに，周囲の人が，母親がケアの主たる責任者であることを認識して振る舞うことも，幼児が母親に強く愛着行動を示すことに繋がっているかもしれない．

### 3.2　周囲の大人との関係

#### 3.2.1　愛着行動

バカ語で，実の父親とその兄弟（オジ）の名称はいずれも「ニュアレ（*nyùa-le*）」である（母親のニュアレ（*nyúa-le*）とはトーンが異なっており，別の単語である）．子どもは，彼らを「ババ（*bàba*）」あるいは「ファファ（*papa*）」と呼ぶ．本節では，周囲の大人として，父親とオジにくわえて，母親の姉妹やオジの妻（ともにオバと表記する），および祖父母への愛着行動について記述する．

【事例 4】農耕民に出会ったとき，父親やオジたちに接近する

E1♂(5) は E2♀(2) と手を繋いで路上を歩いていた．路上に他のバカはいなかった．2 人に向かって，ふだんあまり関わったことのない農耕民女性が前から近づいてくると，E2♀(2) は泣き出した．E1♂(5) が「おいで」と言って E2♀(2) の手を引きながら E♂，オジ，他のバカの男性たちが集まって座って話しているバンジョ（*mbanjo*，屋根のみの集会場）へ向かい，たどり着くと E2♀(2) は泣き止んだ．（ノート 5，40 頁，2019.12.08，村）

日常的にあまり接点のない人が近づくと，2 歳前半児は怖がって泣くことが多い．見知らぬ人が引き起こす緊張に対する「安全基地」は必ずしも母親でなくてもよく，父親やオジらがその役割を担うことができる．幼児は日常的に接点のある集落内のバカには安心感をもっているようである．

【事例 5】母親が掻い出し漁をしている間，父親にまとわりつく

掻い出し漁で，E♀，D♀，D♂が川の中に入って泥で川をせき止めている間，E2♀(2) は E♂と岸にいた．E2♀(2) は座っている E♂の背中に抱きついたり，E♂の周囲をうろうろしたり，E♂のシラミとりをするように頭を触っていた．E♂が立ち上がり，泥の堤防を補強するために近くのラフィアヤシを切りに行くと，E2♀(2) は E♂に向かって「ファファ（お父さん）」と呼んで，泣いた．E♂は，姿は見えないが，声が聞こえる距離におり，「戻るよ」と声をかけながらラフィアヤシを切っていた．（ノート 7，60 頁，2020.01.27，森）

【事例 6】母親が畑仕事をしている間，オバに甘える

E♀は畑仕事に行く前，E2♀(2) を連れて D♀の家にきた．しばらくして，E♀は何も言わずに畑に去った．E2♀(2) は泣かなかった．母親のいない間，E2♀(2) は D♀に抱きついて甘えていた．（ノート 5，19 頁，2019.12.02，村）

これらの例にあるように，母親が生業活動中，E2♀(2) がひとりになるのを恐れたとき，父親やオバは愛着行動の対象になっていた．E2♀(2) は，母親が生業活動をすることや，母親を含めた周囲の人が生業活動を重視していることを推察し，自分の欲求を満たしうる人がその場にいるか，その人は何をしているか，といった状況を観察することによって愛着行動の対象者を選択していたと考えられる．

【事例 7】父親が罠を作っている間，父親の手伝いをする

ワイヤーを巻いて狩猟の罠を作っている C♂のもとに，C7♂(2) はワイヤーをすすんで持って行った．その後 C7♂(2) は，C♂の膝に片手をかけてもたれかかって，C♂が罠を作るのを見ていた（写真 1）．（ノート 3，2 頁，2017.09.22，村）

幼児が父親，オジ・オバ，祖父母に抱きついたり，身体をすりよせたりして密着することは，日常的によく見られた．また，幼児は，父親，オジ・オバ，祖父母に抱き上げられると，相手に腕を回したり，肩に手を乗せたりしていた．これらは父親，オジ・オバ，祖父母へ向けた愛着行動である．

**3.2.2　ケア**

周囲の大人による乳幼児のケアについて述べる．

【事例 8】遠縁の女性が立ち寄り，抱っこする

E♀が D♀の家に来て D♀に E3♀(0) をたくして去っていった．少しして，村のはずれに住

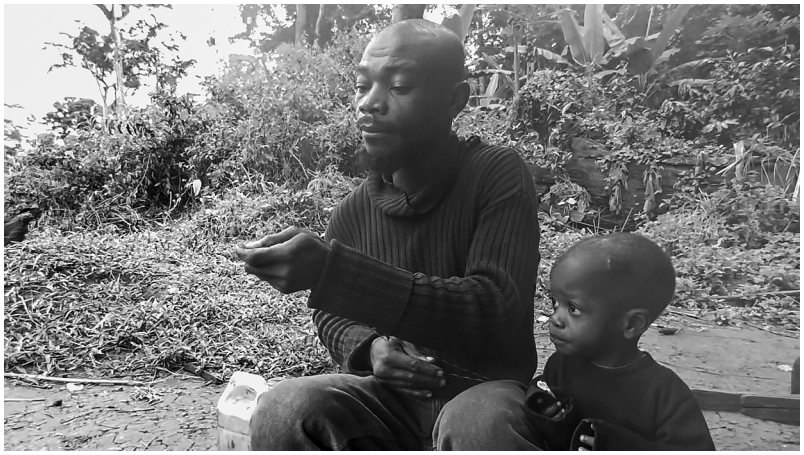

**写真 1　父親が罠を作るのを見る 2 歳男児**

む女性が D♀ の家を訪ねてきた．その女性は E3♀(0) に手を伸ばして抱いた．女性は E3♀(0) を抱きながら D♀ としばらくおしゃべりをした．おしゃべりが終わると，女性は E3♀(0) を D♀ に渡して立ち去った．その後，E♀ が戻ってきて，D♀ は E3♀(0) を E♀ に渡した．（ノート 9，6 頁，2020.02.16，村）

バカは，大人も子どもも頻繁に乳幼児を抱っこする．この女性は少し離れたところに住み，生業活動をともにする機会や料理を分配する機会は少なかったが，乳児のいる家に立ち寄ると，ごく自然に乳児を抱いた．似た事例として，ござを編んでいるところに立ち寄った女性が，代わりにござを編みながら少しおしゃべりをして立ち去ることがあった．このように，ケアであれ作業であれ，行為をシェアすることは，彼女たちのコミュニケーションの特徴のひとつなのかもしれない．

【事例 9】母親がモングルを作っている間，父親とオバが乳幼児を見守る

E♀ がモングルを建てている間，E2♀(2) は座っている E♂ の肩に手をかけていた（写真 2）．D♂ はそばで釣りの準備をしていた．先にモングルを作り終えていた D♀ は，E3♀(0) を布でくるんで肩から下げて立ち，体を揺らして歌いながら E♀ がモングルを建てているのを見ていた（写真 3）．（ノート 7，48 頁，2020.01.24，森）

モングルを建てるのは，主にそのモングルで寝る家族の成人女性である．調理も女性の仕事であり，その間，乳児はキャンプの人々に抱かれ，幼児は歩き回ってキャンプの人々と遊んだ

**写真 2　母親がモングルを建てる横で父親といる 2 歳女児**
注）写真内の右下，E2♀(2) が E♂ の肩に手をかけている．

**写真 3　0 歳女児を歌いながらあやす伯母**

りする．幼児が泣くと，大人たちは「なぜ泣いているの？」と声をかけるなど，絶えず幼児の様子を気にしていた．

【事例 10】母親が採集をしている間，父親と祖父が見守る
森のキャンプで，E♀ が E3♀(0) を抱いて，他の女性たちと採集に出かけようとした．E2♀(2) は E♀ が出かけることに気づき，泣いた．E♀ の姿が見えなくなってしばらくすると，E2♀(2) は泣き止み，一緒に留守番していた E♂ や祖父のそばで遊び始めた．キャンプに他

のバカはいなかった．E♀ が帰る夕方まで E2♀(2) がぐずることは一度もなかった．（ノート 7，73 頁，2020.01.29，森）

この事例の数日前，E2♀(2) は母親の採集について行き，道中疲れてぐずった．そのため，E2♀(2) はキャンプで留守番することになった．母親が出かけるときに，泣くかどうかは周囲の人の存在やそのときの幼児の心身の状態にもよる．この事例では，E2♀(2) は，父親や祖父が周りにいたが，母親との離別の際に母親へ愛着行動が見られた．泣いても母親が戻ってこないことがわかると，E2♀(2) の感情の高まりは徐々に収まり，父親と祖父と安心して遊んでいた．

【事例 11】母親がバナナをとりに行っている間，父親と兄姉が応答する

C♀ が畑にバナナをとりに行き，C8♀(1) は C♂ や兄姉と留守番をしていた．C8♀(1) は，ござの上に座って，物を地面に叩きつけてひとり遊びをしていた．突然，C8♀(1) が「ママ」と言った．すると，家の中でそれぞれ作業をしていた C♂，C2♂(13)，C3♀(12) は同時に「オー」と言って応答した．それを聞いて C8♀(1) は穏やかにひとり遊びを続けた．（ノート 5，34 頁，2019.12.06，村）

母親が不在のとき，ふと母親を思い出して「ママ」と口にした C8♀(1) に対して，父親と兄姉は声が重なるくらい俊敏に応答した．父親や兄姉は C8♀(1) の方を見ず，声だけの応答であったが，幼児の安心に繋がったのであろう．

母親が生業活動に出かけるとき乳児は連れていくが，離乳した幼児はキャンプで留守番をすることが多い．キャンプでは家族・親戚の誰かが責任をもって留守番をする幼児を見守る．幼児が遊んでいるときは，周囲の人は，声の聞こえる範囲，気配の感じられる範囲にいて，幼児の様子をうかがっている．バカの乳児は，家族・親族の女性から，もらい乳をすることがあり，それが可能な場合は乳児でも留守番をすることがある．近隣の村では，姉の乳の出が悪いために妹が頻繁に授乳していた例や，乳児の母親が亡くなり祖母が授乳していた例があった．E3♀(0) と C7♂(2) は，もらい乳はしていなかった．乳を与える子の年齢差が大きいと，乳の質が異なるため授乳しないと女性たちは言っていた．

【事例 12】掻い出し漁をしている間，祖母と年長児が見守る

E♀ は E3♀(0) を連れて，掻い出し漁に出かけた．女性や子どもたちが川で水を掻き出す最中，祖母と C3♀(12) が交代で E3♀(0) を抱いて子守りをした．E3♀(0) が泣き出すと，祖母と C3♀(12) が E3♀(0) を抱いて森の中を歩きまわったり，歌ったり，リベベ（*lígbɛgbɛ*，空

き缶に小さな固い実をいれてふるとガラガラ鳴るおもちゃ）を鳴らしたりして E3♀(0) をあやした．E3♀(0) は泣いたり，泣き止んだりを繰り返していた．しかし E3♀(0) が数分間継続して泣き続けると，泣き声が大きくなったところで E♀ が川から岸にあがって E3♀(0) を受けとり，授乳した．C3♀(12) は，D♀ と C♀ に呼ばれ，川の中に入って水を掻き出した．祖母も自ら川の中に入り，水を掻き出した．授乳が終わり，E♀ はしばらく E3♀(0) を抱いて川岸で座っていた．祖母が川からあがってくると，E♀ は E3♀(0) を祖母に渡し，川に戻って水を掻き出し始めた．水を掻き出していた C♀ は，キャンプで C8♀(1) と留守番している C♂ がそろそろ罠を見に森に行くだろうから，C8♀(1) のケアを交代しにキャンプに戻るように，C2♂(13) と C4♂(10) に言った．2 人はキャンプに戻った．この日の夜，E♀ と祖母は捕った魚をひとつの籠に入れて持ち帰り，ひとつの鍋で調理した．家族 C は，別の籠に魚を入れ，別の鍋で調理した．E♀ は，調理した魚を家族 C に分配した．（ノート 9，63 ～ 65 頁，2020.02.26，森）

生業活動や家事を一緒にするメンバーシップは一定の傾向があるものの，メンバーは固定されているわけではなく，流動的に変化する．バカの生活において生業活動や家事と，ケアは分離されておらず，メンバーの入れ替わりに応じて乳幼児が接する人は変わる．たとえば，事例 12 の掻い出し漁では，作った堤防が崩れると，水が一気に流れ出し，水量が上がる．堤防が崩れる前にできるだけ多くの水を掻き出して魚を捕らねばならない．掻い出し漁は時間との勝負であり，人々の協力が欠かせない．祖母と従姉は，掻い出し漁をしている母親が川からあがってくるまで，乳児を泣き止ませるためにさまざまなことを試みていた．最終的に母親が岸にあがって授乳すると，祖母と従姉は，母親が抜けた分の仕事をするため川に入った．また，キャンプで C8♀(1) と留守番している父親が狩猟に出かけるため，母親は年長児たちに，先にキャンプに戻るよう促していた．

さらに，遊動的なキャンプ生活により，乳幼児のケアに関わる人は変動する．

【事例 13】キャンプの移動に伴い，乳幼児のケアに関わる人が変わる

村から約 9 km 離れた森の中の大きな川の近くに D♂，D♀，E♂，E♀，E1♂(5)，E2♀(2)，E3♀(0)，C2♂(13)，F1♀(7) がキャンプに出かけた．翌日，C♂，C♀，C3♀(12)，C4♂(10)，C5♀(8)，C6♂(6)，C7♂(4)，C8♀(1) と祖父母が村からきてキャンプに合流した．それから 3 日後，祖父，C7♂(4)，E2♀(2) はキャンプで留守番し，その他の 16 人は，大きな川に掻い出し漁に出かけた．そこで約 4 時間かけて堤防を作ったが，あと少しで完成するところで，2 m ほどの蛇が泳いできたため女性たちがパニックになり堤防を壊した．そのため魚は 1 匹も捕れずキャンプに戻ってきた．その後，魚を捕ることを諦めなかった D♂，D♀，E♂，

E♀，C♀と，子どもたちE1♂(5)，E2♀(2)，E3♀(0)，F1♀(7)，C3♀(12)，C4♂(10)，C5♀(8)，C6♂(6)，C7♂(4)，C8♀(1)は再び出かけ，村の農耕民から聞いた魚毒漁を試したが，魚は1匹も死ななかった．その夜，この川には魚が少ないと夕食を食べながら男たちは言い，翌日，そこから約8 km森の奥へ進んだ大きな川の近くにキャンプを移動した．それから3日後，G村の他の集落から，約20人のバカがきて，C家族らのキャンプから歩いて15分ほどの場所でキャンプをした．その集落はD♀の出身集落であり，D♀の妹(12)と，その集落に嫁いだC1♀(16)，その夫がやってきて，C家族のモングルの横にモングルを建てて寝泊まりをはじめた．C1♀(16)とD♀の妹(12)は，C8♀(1)，E3♀(0)，E2♀(2)のケアをよくした．それから数日間，2つの集落のバカたちは時々お互いのキャンプを訪問し合い，ときにはほぼ全員で大きな川で掻い出し漁をしたり，女性と子どもの数人でイモの採集に出かけたりした．その際，森の中を歩いていた女性たちが，遠くで歩いている人たちの音を聞いて声をかけ，そのうちの数人が採集に合流することもあった．（ノート9，12～80頁；ノート10，1～26頁，2020.02.19～03.02，森）

バカは，キャンプの周りの木がきしむ音を聞いて木が倒れて人に直撃することを危惧したり，キャンプの周辺のイモを採集してしまったりするなど居住環境が悪化すると，キャンプを移動する．また，実家の家族や兄弟姉妹など親しい人と合流するためや，他家の子どもが食べ物をこっそり盗るなどの人間関係に関わるトラブルがおきたときも，キャンプを移動したり離合集散が生じたりする要因となる．キャンプのメンバーの流動により，生業活動やケアのメンバーは変動する．それにより乳幼児に関わる人のネットワークは広がっていく．また，キャンプのメンバーが少人数のときは，次の事例14のように，ふだんは乳幼児の身の回りの世話をしない周囲の大人も乳幼児の身の回りの世話をする様子が見られる．

【事例14】母親が掻い出し漁をしている間，オジがウンチをふく

D♂，D♀，E♀，E2♀(2)，E3♀(0)が一緒にキャンプをしていた．E♂は村の畑にバナナをとりに行き，E1♂(5)は，B♂，B♀，祖母，F1♀(7)と一緒に，10 km以上離れた場所で3日間キャンプをしていたためいなかった．D♀，D♂，E♀は大きな川で掻い出し漁をした．E♀はE3♀(0)をD♂に渡し，D♂はE3♀(0)を抱いて，E2♀(2)と並んで川岸に座り，掻い出し漁の様子を見ていた．E3♀(0)がウンチをすると，D♂はE3♀(0)のお尻をふき，服を着せようとした．その際，「自分はこのようなことは普段しない」と筆者に言いながら，着替えの色々なところにウンチをつけるなどして手間どっていた．E3♀(0)が泣き出したので，D♂はE3♀(0)の両脇の下に手を入れて上下に動かした（写真4）．その後，E♀が川からあがってきて授乳した．（ノート7，61頁，2020.01.27，森）

**写真 4　0 歳女児を着替えさせる伯父**

掻い出し漁でオジは，乳児の母親の漁を邪魔することを避け，自分で乳児の排泄の後始末をした．このように手の空いている人が積極的に乳幼児のケアをすることは，人手の必要な作業をしているときや，雨が降り出すなどして急いで作業を終わらせるとき，帰路で日が暮れてしまい急いで夕食の支度をするときなどに見られる．また，E1♂(5) のように，幼児に弟妹ができて，大きくなってくると，周囲の大人は幼児を両親から離して別のキャンプに連れ出すことがある．このような幼児の移動は，乳幼児をたくさん抱えながら生業活動をする家族にとって，ケアの負担が軽減することに繋がる．

【事例 15】母親の出産直後，オジ・オバが上の子の添い寝をする

E♀ は，生後約 1 ヵ月の E3♀(0) と自宅で寝た．E2♀(2) は，毎日ではないが，たびたび D 家の 1 枚のござの上で，D♂ と D♀ の間に寝た．E2♀(2) が夜中に泣くことはなかった．（ノート 7，41 頁，2020.01.21，村）

新生児がいる場合，オバや祖母は，生業活動や家事を母親と一緒に行なったり，新生児の兄姉の身の回りの世話をしたりして，母親の負担を減らすよう支援する．E3♀(0) が産まれてから 1 ヵ月ほど，E♀ は D♀ ないし義母（E♂ の母親）とひとつの鍋で調理をしていた．D♀ や祖母が E2♀(2) の体を洗って，服を着替えさせ，一緒に寝ることもあった．E2♀(2) と D♀ に血縁関係はなかったが，D♀ は子どもがいないこともあって頻繁に E2♀(2) の世話をしていた．家族 E，家族 F には大きな子どもがおらず，オバや祖母が積極的に乳幼児の身の回りの世話をしていた．一方，子どもの多い家族 C では，主に兄姉が乳幼児の身の回りの

世話を手伝っていた．

【事例 16】乳児を抱いていて採集できなかった母親に，オバがイモを分配する
E♀と D♀は森でケケ（*kɛ́kɛ*, 野生ヤマノイモの一種）を見つけた．D♀が山刀と掘棒を使って 1 時間ほどかけて掘り出した．その間，E♀は E3♀(0) を抱いてそばに座り，作業を見ているだけだった．とれたケケを籠に入れる際，D♀が E♀にケケをとるように言い，E♀が少しケケをとった．D♀はもっとケケをとるように促し，半分の量が E♀に分配された．（ノート 9，10 頁，2020.02.17，森）

この事例では，乳児のケアのために作業ができなかった母親にも収穫物が分配された．次の事例は，めったにおこらないが，母親が，家事における役割をきちんと果たさず，周囲の大人はその人の子どものケアの依頼を拒否しようとした例である．

【事例 17】母親が家事をしないとき，乳児の抱っこの依頼をオバが拒否する
E2♀(2) が風邪をひき，体中にできた感染症の小さな傷が化膿し，目イボができていた．E2♀(2) は「ママ」と言って E♀にまとわりついていた．しかし E♀は E2♀(2) に応答せず，酒を飲んで踊っていた．道路でうろうろしていた E2♀(2) に C♀が声をかけて，C3♀(12) のところへ行くよう促した．E♀はその日，E♂と D♂が捕ってきたセンザンコウの肉を調理せずに家の中に放っていた．また，畑にバナナをとりに行くこともなかった．E♀が抱いていた E3♀(0) を D♀に手渡して出かけようとしたら，D♀は「ダメ，ダメ」と言い，抱くのを拒否した．しかし E♀が「（火であぶっている）タバコの葉を家にとりに行ってくるだけ」と説明すると，D♀はしぶしぶ E3♀(0) を受けとった．E♀がタバコをとって戻ると，D♀はすぐに E3♀(0) を E♀に渡した．E♀は E3♀(0) を抱いて再び家に戻った．E♀の義母（E♂の母親）は E♀にセンザンコウを調理するよう言った．筆者は，時々 E2♀(2) を風呂に入れていた D♀に，「E2♀(2) の傷口を洗ったら薬をあげる」と言うと，D♀は「風呂に入れるのは母親がすることだ」と言った．D♀は，E♀が夜に E2♀(2) を預けて踊りに行って一晩帰ってこなかったことの愚痴を筆者に漏らした．そして，D♀は，E♀が自分の畑からではなく近場の E♂の母親の畑からバナナを収穫してくることについて言及しながら「E♀は体力がない」と言った．（ノート 8，65 ～ 66 頁，2020.02.13，村）

バカの母親は泣いている乳児を無視し続けることはない．しかし，幼児の愛着行動にふだんは敏感に応答する母親が，幼児からの働きかけを無視したり，そっけない態度をとったりすることはある．とはいえ，母親が幼児をしばらく放っておくと，夫や義理の母などが注意する．

母親が乳幼児に関して第一の責任を負っているとバカたちは考えている．調理も女性の重要な仕事である．各世帯の女性が調理し，自分と子どもたちの分，男たちの分，他の女性たちの分をとり分け，分配する．女性と子どもは各々の家で食べ，男性はバンジョに集まって食べる．料理のシェアと，子どもたちのケアをシェアすることは，全体としてひとつのシェアリングのしくみなのかもしれない．

次はケアの内容についてである．

【事例 18】父親が身体を使った遊びをする

C♂ は仕掛けた罠の見回りのために森に出かけ，昼前に帰ってきた．C♂ がござの上に寝転がって C7♂(2) の名前を呼ぶと，C7♂(2) は父親の方へかけて行った．C♂ は C7♂(2) の身体を持ち上げ，お腹の上にのせた．C7♂(2) は C♂ のお腹を乗り降りして遊んだ．（ノート 4，14 頁，2017.11.30，家）

【事例 19】父親が踊りに誘う

E♂ は森のキャンプにラジカセを持ってきていた．E♀ が朝食の準備をしている間，E♂ は E2♀(2) を踊りに誘った．E♂ は音楽をながし，歌いながら E2♀(2) に時々声をかけて，踊らせた．（ノート 7，77 頁，2020.01.30，森）

母親は幼児と遊ぶとしても座ったまま幼児の相手をする程度であるのに対して，父親や年長児は，幼児が身体を激しく動かす遊びをしたりする．また，父親やオジは，幼児におもちゃを作ってあげたり，太鼓の叩き方を教えたり，乳児に懐中電灯を使って動く光を見せてあやしたりするなど，物を使って乳幼児を遊ばせることがある．

【事例 20】父親が応答したり教示したりする

森のキャンプで E♀ と D♀ は木を切って，焚火をおこしていた．その間，E♂ は E3♀(0) を抱いて座っていた．E3♀(0) が泣くと，E♂ は E3♀(0) を E♀ に渡し，E♀ は授乳した．E♂ はシタトゥンガの蹄の油を吸って食べるため，蹄を火であぶり始めた．E2♀(2) がやってきて「ゲンディ（*gɛ̀ndì*，ピーターズダイカー）」と言った．E♂ は「ゲンディはどこだい？これはンブリ（*mbùlì*，シタトゥンガのオス）だ」と答えた．E2♀(2) は E♂ の周りをうろうろしたり E♂ の膝に寄りかかったりを繰り返した．E2♀(2) が「コト（*kɔtɔ*，蹄）」と言うと，E♂ も「コト」と言い，E2♀(2) は再び「コト」と繰り返した．その後も，E2♀(2) が「シア（*sià*，見て）」，「アカ（*akà*，どこ）」と言うと，父親は応答していた．（ノート 9，17 頁，2020.02.20，森）

父親の他にも，母親やオジ・オバ，祖父母が，幼児にお手伝いをさせるとき，食べ物や動植物，道具などの名前を幼児に教える例が観察された．

【事例 21】祖父が注意する

男性，女性，年長児たちは，蜂蜜とイモを探しに連れだって森に出かけた．キャンプには，祖父と子どもたちが残っていた．祖父は足が悪いため，モングルの中に座ってケンジャ（*kénjà*，肉を背負うための籠）を編んでいた．C4♂(10)，C5♀(8)，C6♂(6)，F1♀(7) は，キャンプのすぐ横を流れる川の中ではしゃぎながら遊んでいた．まだ自分で歩いて川まで降りていけない E2♀(2) と E1♂(5) は，子どもたちの声を聞きながら川岸をうろうろしていた．E2♀(2) や E1♂(5) が，川岸の小道を歩いて行こうとするたびに，モングルの中から祖父は「遠くに行ってはだめだ」と叫んだ．E2♀(2) や E1♂(5) は祖父の声を聞くとキャンプの方へ戻ってきていた．（ノート 9，23 頁，2020.02.21，森）

ひとりで歩き回る幼児には，危険を教える，生活のマナーやルールを教えるといった，乳児とは異なるケアが必要になる．幼児が研いだばかりの山刀に触ろうとすると，オジ・オバ，祖父母などが「それは鋭いよ」と注意をする例などが観察された．

【事例 22】多年齢子ども集団に入れないとき，父親が相手をする

E1♂(3) は，サッカーをしている子ども集団の周囲でうろうろして，C2♂(11) ら年長児に何度も接触しようとしていた．しかし，年長児たちは E1♂(3) を退け，E1♂(3) は泣いた．年長児たちがボールを置いて去った後，E♂ が来て，E♂ がゆっくりボールを E1♂(3) に蹴って，E1♂(3) は蹴り返し，2 人はボールを蹴り合って遊んだ．（ノート 2，66 頁，2017.09.19，村）

幼児が周囲にいるとき，兄姉たちは「おいで」と言って遊びの集団に幼児を入れてあげることもあるが，そうでないこともある．父親やオジは，幼児が多年齢の子ども集団に入れずに泣いているのを見ると，集団への参加を手助けしたり，幼児の相手をしたりしていた．

### 3.2.3　愛着行動とケア

2 歳前半児から，父親，オジ・オバ，祖父母などへの愛着行動が見られた．前節で述べたように，幼児が強い負の感情を抱いたりしたときには，周囲の人は声をかけたり，気を紛らわせたりして対応するものの，幼児は母親を強く求め，周囲の人への愛着行動はあまり見られなかった．一方，幼児が精神的に落ち着いているときには，好奇心や遊び心に動機づけられ，身体を大きく使って遊んだり，言葉を教えたり，危険に対して注意するなど，多様なケアをする

周囲の大人に接近していた．そのときの状況に応じて，周囲の大人は誰がケアをするかが異なっており，幼児の愛着行動の対象者も状況に応じて違っていた．また，母親が生業活動をしていたり不在であったりして幼児が接近するのが難しいとき，よく知らない人が接近したときや，ひとりになることを恐れたときに，周囲の大人への愛着行動が見られた．周囲の人はいざとなればさまざまな内容のケアをすることが可能であり，場面に応じて柔軟に協力して乳幼児のケアを行なっていた．それゆえ複数の人が愛着行動の対象者になっていると考えられる．さらに，母親が，自分がケアに関われないときには，周囲の大人が責任と役割をもってケアをしてくれることを認識して振る舞うことも，幼児が周囲の大人に愛着行動を示すことに繋がっているかもしれない．

### 3.3　年長児との関係

#### 3.3.1　愛着行動

年長児への愛着行動について記述する．

【事例 23】最年長の姉がキャンプに帰ってきたとき，密着する

新しいキャンプに移動し，女性たちはモングルを作るために，クズウコン科の植物の葉をとりに行った．キャンプに残った C♂ は，E2♀(2) と E1♂(5) が倒木の上ではしゃいで遊んでいるのを見て，怪我しないように「ゆっくり」と遠くから言っていた．F1♀(7) は，「(愛しい) 子よ」と言いながら E♀ から渡された E3♀(0) を抱き，C8♀(1) のそばに立っていた．モングルの材料になる木の束を持って D♀ と E♀ と C3♀(12) が，C♀ より先に帰ってきた．F1♀(7) は E3♀(0) を E♀ に渡した．C8♀(1) は C3♀(12) のところに行き，抱きついた．（ノート 9，47 頁，2020.02.24，村）

母親が不在のときは，幼児は最年長の姉によく愛着行動を示す．C8♀(1) は，当初，身の回りの世話をよくしてくれていた長女 C1♀(16) に対して愛着行動を頻繁に示していた．長女が嫁ぐと，次女 C3♀(12) が長女の代わりに乳幼児の身の回りの世話をすることが多くなった．そのため，C8♀(1) は次女に愛着行動を示すようになったと考えられる．

母親は生業活動から戻ってくると，収穫物を入れた籠を置き，すぐに水汲みや薪をとりに出かけ，その後も調理のために忙しく働く．このように母親が忙しいときには，幼児が母親に抱きつくなどの愛着行動はあまり見られなかった．母親は幼児の兄姉と一緒に帰ってくることが多く，兄姉は幼児を抱き上げたり一緒に遊んだりするため，母親との再会が強調されないのだろう．

【事例 24】家の前で兄姉に接近する

家の前で，C1♀(14) がござを編み，C2♂(11) と C3♀(10) がベンチに座っていた．C2♂(11) はサッカーボールを持っていた．C7♂(2) は，その間をうろうろしながら，それぞれに接近しては，膝に手をかけたり触れたりし，兄姉たちに抱きかかえられ笑顔になっていた．（ノート 3，4 頁，2017.09.23，村）

母親がいても，幼児は年長児たちに関心を示し，年長児たちにまとわりついてさかんに親密な接触を求めていた．幼児が接触しに行くと，兄姉はよく幼児を抱きかかえていた．あるとき幼児たちが，年長児が歌と踊りをしたり，言葉遊びをしたりしているのをじっと見ていた．そして幼児たちだけで真似して遊び始めた．一般に，幼児からの年長の子ども集団への関心は非常に高いようにみえる．

**3.3.2　ケア**

兄姉の中でも最年長の姉は最も母親を手伝い，乳幼児の身の回りの世話をする．

【事例 25】子ども集団の中で最年長の姉が最年少児を優先してパパイヤを渡す

C2♂(11) らが間食としてパパイヤを畑からとってきた．その周囲に兄弟姉妹が集まった．最年長の C1♀(14) がパパイヤを受けとり，切り分けて，まず一番大きなひと切れを最年少の C7♂(2) に与えた．その後，妹弟たちに平等に分配した．（ノート 2，80 頁，2017.09.21，村）

最年少児を優先することは，両親やオジ・オバ，祖父母によく見られた．年長児たちもそれを見て，最年少児を優先していると考えられる．子どもたちと筆者が農耕民のカカオ畑に収穫の手伝いに行った際，C7♂(2) を渡された筆者は，C1♀(14) に，カカオの汁をもっと頻繁に C7♂(2) に吸わせるようにと注意された．このように，最年長の姉は常に最年少児に気を配り，ケアが不十分な場合には注意をすることがある．

年長児の発達段階や性別に応じて，ケアの内容は異なる．大人が生業活動に従事しているとき，周囲の大人は年長児にケアや手伝いを促すことがある．年長児が 7 歳頃になると，乳幼児の抱っこを任せていた．とはいえ，大人が無理強いすることはほとんどない．たとえば，思春期の子どもが指示を無視することがあったが，大人はそれに対して直接叱ることはなかった．年長児は，ケアできそうな養育者が他にいれば遊びに出かけ，周囲の状況を見て，自分がケアをしなければならないと判断すると自ら動いていた．

【事例 26】母親が運搬できないとき，従兄が運搬する

家族 D，家族 E，C2♂(13)，F1♀(7) は新しいキャンプへ移るために，1 列になって森を移動していた．E1♂(5) は，よく知った道であったため，小さなポリタンクを持って先頭を歩いていた．続いて，E♂ が槍を持ち，E2♀(2) を抱いて歩いていた．その後を，C2♂(13) が斧を持ちリュックを背負って歩き，続いて F1♀(7) が小さな籠を額から後ろにぶら下げて背負って歩いていた．さらにその後ろを，D♂ が荷物と銃を持ち，D♀ が大きな籠を背負い，E♀ は大きな籠を背負いながら，布で巻いた E3♀(0) を抱いて歩いていた．先頭の E1♂(5) が足先の傷が痛いと言って泣き出した．E♂ は，E1♂(5) から小さなタンクを引きとり，C2♂(13) から斧とリュックを引きとった．そして E♂ は，C2♂(13) に E2♀(2) を渡した．C2♂(13) は，E2♀(2) を布で巻いて，額から後ろにぶら下げて背負って歩いた．E2♀(2) に巻いた布が締まりすぎて，E2♀(2) の脚が直立しており，D♀ がそれを見て笑った．今度は F1♀(7) が列の先頭を歩いた．（ノート 5，13 頁，2020.02.19，森）

大人と子どもの役割の境界は明確には分かれていない．森の中を歩くとき，もし子どもがよく知っている道であれば，その子どもが積極的に前を歩くことがある．また，年長児は大人を観察してケアの仕方を学んでおり，普段しない乳幼児のケアの役割が急に回ってきても，ごく自然にその役を引き受けることが多い．

### 3.3.3　愛着行動とケア

生業から帰ってきた母親や年長児と再会するとき，幼児は，忙しい母親よりも，遊んでくれる年長児たちに接近していた．多年齢子ども集団の中では，2 歳前半児が精神的に落ち着いているときには年長児たちに接近し，負の感情を抱いたときには最年長の姉に接近していた．年長児はそれぞれの発達段階に応じて乳幼児のケアをしていた．特に，最年長の姉は，普段から母親に次いで乳幼児の身の回りの世話をしていた．さらに，周囲の人が，最年長の姉が母親に次ぐケアの責任者であることを認識していることも，幼児が，子ども集団の中で最年長の姉に愛着行動を強く示すことに繋がっているかもしれない．つまり，最年長の姉は，幼児のケアと愛着対象者として，母親の代理を担っていると考えられる．

## 4．総合考察

### 4.1　バカの幼児の愛着行動の特徴

3 節で記述した事例を踏まえ，ボウルビィ［Bowlby 1969］の愛着行動のパターンに照らしながら，バカの幼児の愛着行動の特徴を整理し，表 1 に示す．今回は質的な記述により傾向を示したが，量的に分析を行なうことは今後の課題である．なお，ボウルビィの愛着行動のパターンの説明では愛着の対象は「母親」と記されているが，周囲の大人や年長児についても同

**表1　ボウルビィの愛着行動のパターン別にみたバカの2歳前半児の愛着行動の対象者間の頻度の比較**

| 愛着行動 | | 愛着行動の対象者 | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | | 母親 | 周囲の大人 | 年長児 | |
| | | | | 最年長の姉 | その他 |
| よく観察された | (a) 相互作用を開始する行動 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | (b) 相互作用に反応し相互作用を維持する行動 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | (e) 探索行動 | ◎ | ○ | ○ | △ |
| | (f) 引き下がる行動 | ◎ | ○ | ○ | △ |
| あまり観察されなかった | (c) 離別を避けようとする行動 | ◎ | ○ | ○ | △ |
| | (d) 再会する場面での行動 | ○ | ○ | ○ | ○ |

＊場面により変動があるが，◎：他の対象者よりも観察された，○：観察された，△：他の対象者よりも観察されなかった．

じ基準にて判断した．ボウルビィの愛着行動のパターンのうち，調査期間中に，バカの幼児によく観察された愛着行動は，(a) 相互作用を開始する行動や，(b) 相互作用に反応し相互作用を維持する行動，(e) 探索行動，(f) 引き下がる行動であった．また，あまり観察されなかった愛着行動は，(c) 離別を避けようとする行動と (d) 再会する場面での行動であった．

まず，よく観察された愛着行動についてである．(a) 相互作用を開始する行動や，(b) 相互作用に反応し相互作用を維持する行動については，幼児の愛着行動の対象者は複数人おり，母親，周囲の大人，年長児のいずれに対しても観察された．(e) 探索行動や，(f) 引き下がる行動については，安心して探索を行なうことのできる「安全基地」になるのは母親であった．特に，幼児の体調が悪いときや，喧嘩をしたときなど感情の激しい揺れが生じたときは，他の人ではなく母親の存在を確認していた．幼児が母親に接近できない状況において，見知らぬ人に出会ったりひとりになることを恐れたりしたときは最年長の姉や周囲の大人に接近を求めた．

次は，あまり観察されなかった愛着行動についてである．(c) 離別を避けようとする行動は，周囲の人の存在や対応などの状況によって，母親に対して観察されたりされなかったりした．たとえば母親が生業活動に出かけるときに他の愛着対象者が幼児の身近にいるときは，幼児は母親との離別を避けようとしなかった．周囲の大人に対して離別を避けようとする行動は，幼児がひとりになるのを恐れたときに見られた．年長児に対して離別を避けようとする行動は，幼児が多年齢の子ども集団から外されたときには見られた．(d) 再会する場面での行動は，母親，周囲の大人，年長児，いずれにも見られたが，毎回ではなかった．周囲の人の存在や対応により母親に対してでさえも見られないことはよくあった．生業活動に出かけた母親が年長児とともに帰ってくると，幼児は遊んでくれる年長児に関心を寄せ，母親に愛着行動を

示すことは少なかった．また，幼児のそばには，家族や親戚，顔見知りの人が常におり，そもそも愛着対象者との苦痛に満ちた離別は少なく，それゆえ再開の場面が強調されないのだと考えられる．

このようにバカの 2 歳前半児は母親への愛着が概して高かったが，文脈によって多様な人々に対して愛着行動を示していた．そのため，バカの 2 歳前半児の愛着行動のパターンは，対象を周囲の人々に拡張することで，ボウルビィが提示したものにかなり一致するといってよいだろう．バカと隣接して分布するアカの愛着行動の研究によれば，乳幼児は母子が離別するときに苦痛のシグナルを示すことは少なく，乳幼児の物理的および感情的なニーズが複数の人によって満たされていることが示唆されている［Meehan and Hawks 2013］．バカの幼児も，母親が不在で，ひとりになることを恐れたときには，周囲の状況を見て愛着行動の対象者を選択しており，複数の愛着対象者の存在が安心感に繋がっていた．

### 4.2　バカのケアの特徴

バカの乳幼児の周囲にいる人は，社会関係，性，発達段階，経験，性格，生業活動や家事との兼ね合いなどに応じてケアをしていた．ヒューレットによれば，アカの母親は乳幼児に栄養を与えたり，乳幼児を運んだりすることが多く，アカの父親は抱っこしたり，乳幼児を抱きしめたり，キスをしたり，一緒に遊んだりすることが多いという［Hewlett 1988］．バカも，各人のケアの内容には偏りがあった．母親ひとりではカバーしきれない多様な内容のケアを周囲の人が担うことによって，子どもの発達段階ごとに求められるさまざまなケアが，全体として実現していた．バカの社会は欧米や日本でみられる保育園・幼稚園のような制度はないが，コミュニティの各メンバーが子どもの成長に重要なケアを提供しているのである．

バカの生業活動，家事，ケアは，予測できない自然という生活環境と，キャンプのメンバーの流動，生業活動のメンバーの流動，生業活動中の人の出入りがある生活環境の中で行なわれる．その時々の集団での活動を滞りなく遂行するための協力行動のひとつに乳幼児のケアがあると考えられる．そして母親は乳幼児の身の回りの世話だけでなく生業活動と家事を行なうという共通認識がある．母親が生業活動，家事，社交，休息などのために子育てから離れる時間をもつことを周囲の人は認めている．このように周囲の人が母親を支援することは，母親にとっても，集団にとっても利点がある．また，アカを観察したミーハン［Meehan 2009］も，母親の生業活動中に母親以外の養育者がケアすることで，乳児の潜在的なリスクを一部相殺していると述べている．エフェでも，他の人の姿が見えず，声も聞こえないという意味で，乳幼児がひとりになることはほとんどないという［Tronick *et al.* 1992］．バカにおいても，母親が忙しいときには誰かが乳幼児を見守り，ときには母親の代理で乳幼児の身の回りの世話をし，乳幼児のケアが途切れないようにするといったように，集団のメンバーでケアをシェアするという共通認識がある．バカの乳幼児に対するケアは，大まかな役割があるものの，それはかな

り融通のきくものである．つまり，バカ全員がさまざまなケアを行なうことが可能なジェネラリストだといえる．

年長児に注目して，各人が，どのようにしてケアのジェネラリストになるのか考察してみたい．狩猟採集活動では予測が困難なことに対応しなければならない場面が多く，刻々と変化する状況に応じた創造的で多様な対処法とその場での判断が必要とされる［Gray 2011］．バカの年長児たちは，幼い頃からさまざまなケアの仕方を目にしており，みずから実践する機会もある．森での狩猟採集生活では，大人たちが生業活動に忙しかったり，一時的にキャンプから出払って不在になったりすることがある．そのようなときには，子どもは男女ともに，生業活動や家事の手伝いだけでなく，ふだんしない種類のケアをすることを求められることがある．また，年長児が多くの時間を過ごす多年齢子ども集団は，子どもたちが遊びながらバカの生活に必要なことを学ぶ場である．子ども集団の中で，最年長の姉が率先して幼児をケアし，他の年長児たちも最年長の姉がケアできないときには代わって対応する．長女が結婚するなどして子ども集団から抜けると，次女が繰り上がって長女がしていた役割を引き継ぐ．このように幼児は，年長児によってケアされる側から，年少児をケアする側へと立ち位置を変化させていくと考えられる．また，バカの娘たちは母親に近いケアを実践してきた経験により，母親になる準備ができている．そして，自然なかたちで周囲の人々に乳幼児をあずけることもできる．

### 4.3　途切れないケアによる愛着対象者の広がり

バカのケアの特徴は，乳幼児の周囲にいる人々が柔軟に協力しながらさまざまなケアができる状況が常に維持されている点にあるといえる．幼児をとり巻く人々の社会関係のネットワークの中で活性化している人はダイナミックに変化しており，バカの幼児の愛着行動の対象者は，その時々の場面によって変化する．誰かがケアをしてくれるというケアの途切れない環境の中で育ってきた幼児は，周囲の人が幼児に安心安全をもたらしてくれると認識しており，幼児の愛着対象者は母親を超えて拡大していく．このように幼児の愛着は，その幼児をめぐる社会関係のネットワークの特徴を反映してさまざまなかたちをとりうるのであり，順位は固定されておらず，順位づけする必要はないと筆者は考える．これが先述した愛着研究において検討すべき 3 つの問い［Morelli *et al.* 2017］のうち，1 つ目の問いである，子どもが形成する愛着に順位をつけなければならないのか，に対するバカの事例に基づく回答になるだろう．

子どもが多くの養育者に触れる機会が増えると，養育者と子どもの関わり方は必然的に多様になる．したがって，乳幼児は，異なるかたちで接してくるさまざまな人々との関係を調整しているはずである．バカの生業活動，家事，ケアにおいて見られる，周囲の状況を把握して対処する集団としての連携力は，乳幼児の頃から多様な場面で多様な人々と関わることをとおして育まれているのかもしれない．いずれにしても，バカの乳幼児の周りには常に多くの人がいるため，特定の養育者との 2 者間だけの相互行為で完結することよりも，同時に第三者が関

わることのほうが多い．つまり，幼児の愛着行動は，直接的な対象者だけではなく複数人を含む調整システムの中で生じていると考えるべきだろう．これが，モレリらの 2 つ目の問いである，愛着は常に 2 者間の調整システムに帰結できるのか，に対するバカの事例に基づく回答になる．

バカの 2 歳前半児は複数いる愛着対象者のもとに戻りながら探索行動を行ない，愛着のネットワークを広げていた．たとえば，幼児の信頼感や安心感は，最年長の姉を媒介として多年齢子ども集団におよんでいた．幼児の愛着対象者は，乳児の頃から身の回りの世話をしていた最年長の姉を媒介として多年齢子ども集団全体へと広がり，幼児が母親から多年齢子ども集団へ移行するときに愛着対象者の存在は途切れていない．しかし，ふだんから接点があまりない農耕民や外来者が近づいてくると，幼児は怖がり，家族・親戚，あるいは顔見知りのバカたちに接近していた．このような行動には，自分が外来者をよく知らないということだけでなく，周囲の者たちがその人にどのような反応をするかも影響しているだろう．たとえば，バカたちは，あまり知らない農耕民が近づいてくるのが目に入ると，ピタリと話を止めることがある．逆に，顔見知りの人が近づいてくる場合には，何の反応もせず作業をしたり話を続けたりする．このような周囲の人々の反応が，2 歳前半児の信頼感や安心感の対象の範囲に影響すると考えられる．そして，2 歳前半児の信頼感や安心感は，身の回りの世話をする人だけでなく集団全体におよぶこともあるかもしれない．このことは，子どもの信頼感や安心感の対象は，養育者を超えて集団全体におよぶか，というモレリらの 3 つ目の問いに関わるが，信頼感のおよぶ範囲はどの程度か，またどのような要因がその範囲に関係しているかは，今後の課題である．

乳幼児が特定の養育者との間に形成する強い感情的な結びつき，すなわち愛着は，正常な感情や社会性の発達の基礎となるとボウルビィは主張し，愛着理論を提唱した．人類の始原の姿を残すと考えられた狩猟採集民ブッシュマンの母子の強い結びつきが示されたことにより，愛着理論は後押しされた．しかしその後，狩猟採集民ピグミーにおいて，多くの養育者により乳幼児のケアがなされているという事例が報告された．本研究では，バカ・ピグミーの養育者たちは，乳幼児のケアの責任者は母親であること，幼児が強い負の感情を抱いたときの愛着対象者は母親であることを認識しつつ，柔軟に母親の代理も務めながら幼児をケアしていたことが明らかになった．幼児は，母親が生業中など，母親に接触できないときには，周囲の大人や年長児を愛着対象者としていた．バカの生業活動，家事，ケアは分離しておらず，連携された活動であり，幼児の愛着行動は，複数人の養育者との相互行為の中で生み出され，成り立っていることがみえてきた．つまり，質的研究により，バカの子育てにおいて，ピグミー研究で指摘されてきたマルチプル・ケアテーキングと，ブッシュマン研究で指摘されてきた母子密着型のケアの双方が状況によって観察されたことになる．また，ブッシュマン研究でも，母親以外の周囲の大人と乳幼児の関わりが見られ［Konner 2005］，母親以外の人々が乳幼児のケアに貢

献しており，母子関係自体がより広い親族ネットワークに支えられていると報告されている［高田 2012; Takada 2014］．さらに近年，定住化の影響を受けてブッシュマンでも年長児と乳幼児の関わりが多くなっていることも指摘されている［Takada 2014］．したがって，ブッシュマンとピグミーにおける子育ての相違は，母子密着とマルチプル・ケアテーキングとして対比されるものというより，両者に共通する要素が異なった強度で顕在化する結果だと考えるべきだろう．どのような要因が，母子密着やマルチプル・ケアテーキングに影響しているのか．コナー［Konner 2005］は狩猟採集民の子育ての特徴の一般化を試みたHGCモデルと，環境への適応によって説明するCFAモデルを提案した．狩猟採集民の子育ては，HGCモデルに代表されるような一般化と，環境によって異なる地域差の両方を捉えることが必要である．狩猟採集生活に影響をおよぼす自然環境，生活様式や慣習，人々のケアの責任・役割への認識と実践，ケアする人の関係のネットワークなどの社会環境を検討することが，狩猟採集民の多様な子育てを明らかにすることに繋がる．そのためには乳幼児とその場にいる人々の相互行為を，文脈と切り離さずに詳細に把握し，従来の量的研究で説明できなかったことを質的研究で補うことが重要である．

## 謝　辞

本研究は，日本科学協会の笹川科学研究助成（2021年度，研究番号：2021-1017）と日本学生支援機構エクスプローラー・プログラム（2017・2019年度）による助成を受けたものです．京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科の安岡宏和先生，高田明先生，木村大治先生をはじめ，教員の方々に深謝申し上げます．最後に，L集落のバカの人々，そして調査と研究を支えてくださった多くの方々に深く感謝の意を表します．

## 引 用 文 献

Ainsworth, M. D. S. 1967. *Infancy in Uganda: Infant Care and the Growth of Love*. Baltimore: Johns Hopkins Press.

Ainsworth, M. D. S., M. C. Blehar, E. Waters and S. Wall. 1978. *Patterns of Attachment: A Psychological Study of the Strange Situation*. Oxford: Lawrence Erlbaum.

Bowlby, J. 1951. Maternal Care and Mental Health. *Bulletin of the World Health Organization* 3: 355–533.

_____. 1969. *Attachment and Loss: Vol. 1. Attachment*. New York: Basic Books.［ジョン・ボウルビィ．1976.『母子関係の理論 1 愛着行動』黒田実郎・大羽蓁・岡田洋子・黒田聖一訳，岩崎学術出版社.］

_____. 1988. *A Secure Base: Clinical Applications of Attachment Theory*. London: Routledge.［ジョン・ボウルビィ．1993.『母と子のアタッチメント 心の安全基地』二木武監訳，医歯薬出版社.］

Everett, D. 2014. Concentric Circles of Attachment among the Pirahã: A Brief Survey. In H. Otto and H. Keller eds., *Different Faces of Attachment: Cultural Variations on a Universal Human Need*. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 169–186.

Gaskins, S., M. Beeghly, K. A. Bard, A. Gernhardt, C. H. Liu, D. M. Teti, R. A. Thompson, T. S. Weisner and R. D. Yovsi. 2017. Meaning and Methods in the Study and Assessment of Attachment. In H. Keller

and K. A. Bard eds., *The Cultural Nature of Attachment: Contextualizing Relationships and Development*. Massachusetts Institute of Technology and the Frankfurt Institute for Advanced Studies, pp. 195–229.

Gottlieb, A. 2014. Is It Time to Detach from Attachment Theory? Perspectives from the West African Rain Forest. In H. Otto and H. Keller eds., *Different Faces of Attachment: Cultural Variations on a Universal Human Need*. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 187–214.

Gray, P. 2011. The Evolutionary Biology of Education: How Our Hunter-Gatherer Educative Instincts Could Form the Basis for Education Today, *Evolution: Education and Outreach* 4(1): 28–40.

Grossmann, K., K. E. Grossmann, G. Spangler, G. Suess and L. Unzner. 1985. Maternal Sensitivity and Newborns' Orientation Responses as Related to Quality of Attachment in Northern Germany. *Monographs of the Society for Research in Child Development* 50(1–2): 233–256.

Harwood, R. L., J. G. Miller and L. N. Irizarry. 1995. *Culture and Attachment: Perceptions of the Child in Context*. New York: Guilford.

Hewlett, B. S. 1988. *Sexual Selection and Paternal Investment among Aka Pygmies*. In L. Betzig, M. Borgerhoff Mulder and P. Turke eds., *Human Reproductive Behavior: A Darwinian Perspective*. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 263–276.

_____. 1991a. *Intimate Fathers: The Nature and Context of Aka Pygmy Paternal Infant Care*. Ann Arbor: University of Michigan Press.

_____. 1991b. Demography and Childcare in Preindustrial Societies, *Journal of Anthropological Research* 47(1): 1–37.

_____. 1996. Cultural Diversity among African Pygmies. In S. Kent ed., *Cultural Diversity among Twentieth-Century Foragers: An African Perspective*. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 215–244.

Hewlett, B. S., M. E. Lamb, D. Shannon, B. Leyendecker and A. Schölmerich. 1998. Culture and Early Infancy among Central African Foragers and Farmers, *Developmental Psychology* 34(5): 653–661.

Hewlett, B. S., M. E. Lamb, B. Leyendecker and A. Schölmerich. 2000. Internal Working Models, Trust, and Sharing among Foragers, *Current Anthropology* 41(2): 287–297.

Hirasawa, A. 2005. Infant Care among the Sedentarized Baka Hunter-Gatheres. In B. S. Hewlett and M. E. Lamb eds., *Hunter-Gatherer Childhoods: Evolutionary, Developmental and Cultural Perspectives*. New Brunswick, NJ: Transaction Publishers, pp. 365–383.

Hrdy, S. B. 2005. Comes the Child before Man: How Cooperative Breeding and Prolonged Postweaning Dependence Shaped Human Potential. In B. S. Hewlett and M. E. Lamb eds., *Hunter-Gatherer Childhoods: Evolutionary, Developmental and Cultural Perspectives*. New Brunswick, NJ: Transaction Publishers, pp. 65–91.

_____. 2007. Evolutionary Context of Human Development: The Cooperative Breeding Model. In C. A. Salmon and T. K. Shackelford eds., *Family Relationships: An Evolutionary Perspective*. Oxford: Oxford University Press, pp. 39–68.

Ivey, P. 2000. Cooperative Reproduction in Ituri Forest Hunter-Gatherers: Who Cares for Efe Infants?, *Current Anthropology* 41: 856–866.

Joiris, D. V. 1998. *La Chasse, la Chance, la Chant: Aspects du System Rituel des Baka du Cameroun*. Bruxelles: Université Libre de Bruxelles.

Keller, H. 2007. *Cultures of infancy*. Mahwah, NJ: Erlbaum.

_____. 2013. Attachment and Culture, *Journal of Cross-Cultural Psychology* 44(2): 175–194.

Keller, H. and K. A. Bard eds. 2017. *The Cultural Nature of Attachment*. Cambridge, MA: MIT Press.

Konner, M. J. 1977. Infancy among the Kalahari Desert San. In H. Liederman, S. Tulkin and A. Rosenfeld eds., *Culture and Infancy*. New York: Academic Press.

_____. 2005. Hunter-Gatherer Infancy and Childhood: The !Kung and Others. In B. S. Hewlett and M. E. Lamb eds., *Hunter-Gatherer Childhoods: Evolutionary, Developmental and Cultural Perspectives*. New Brunswick, NJ: Transaction Publishers, pp. 19–64.

LeVine, R. A. and P. M. Miller. 1990. Commentary, *Human Development* (Special Topic: Cross-Cultural Validity of Attachment Theory) 33(1): 73–80.

LeVine, R. A. and K. Norman. 2001. The Infant's Acquisition of Culture: Early Attachment Reexamined in Anthropological Perspective. In C. C. Moore and H. F. Mathews eds., *The Psychology of Cultural Experience*. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 83–104.

Meehan, C. L. 2009. Maternal Time Allocation in Two Cooperative Childrearing Societies, *Human Nature* 20(4): 375–393.

Meehan, C. L. and S. Hawks. 2013. Cooperative Breeding and Attachment among the Aka Foragers. In N. Quinn and J. M. Mageo eds., *Attachment Reconsidered: Cultural Perspectives on a Western Theory*. New York: Palgrave Macmillan US, pp. 85–113.

Meehan, C. L. and S. Hawks. 2014. Maternal and Allomaternal Responsiveness: The Significance of Cooperative Caregiving in Attachment Theory. In H. Otto and H. Keller eds., *Different Faces of Attachment: Cultural Variations on a Universal Human Need*. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 113–140.

Morelli, G., N. Chaudhary, A. Gottlieb, H. Keller, M. Murray, N. Quinn, M. Rosabal-Coto, G. Scheidecker, A. Takada and M. Vicedo. 2017. Taking Culture Seriously. In H. Keller and K. A. Bard eds., *The Cultural Nature of Attachment*. Cambridge, MA: MIT Press, pp. 139–169.

Otto, H. 2014. Don't Show Your Emotions! Emotion Regulation and Attachment in the Cameroonian Nso. In H. Otto and H. Keller eds., *Different Faces of Attachment: Cultural Variations on a Universal Human Need*. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 215–229.

Otto, H. and H. Keller eds. 2014. *Different Faces of Attachment: Cultural Variations on a Universal Human Need*. Cambridge: Cambridge University Press.

Quinn, N. and J. M. Mageo eds. 2013. *Attachment Reconsidered: Cultural Perspectives on a Western Theory*. New York: Palgrave Macmillan.

Rogoff, B. 2003. *The Cultural Nature of Human Development*. Oxford: Oxford University Press.

Sagi, A., M. E. Lamb, K. S. Lewkowicz, R. Shoham, R. Dvir and D. Estes. 1985. Security of Infant-Mother, -Father, and -*Metapelet* Attachments among Kibbutz-Reared Israeli Children. *Monographs of the Society for Research in Child Development* 50(1–2): 257–275.

Takada, A. 2014. Kinship and Caregiving Practices among the Ekoka !Xun. In A. Barnard and G. Boden eds., *Southern African Khoisan Kinship Systems*. Research in Khoisan Studies Volume 30. Cologne, Germany: Ruediger Koeppe Verlag Koeln, pp. 99–120.

Takahashi, K. 1986. Examining the Strange-Situation Procedure with Japanese Mothers and 12-Month-Old Infants, *Developmental Psychology* 22(2): 265–270.

Tronick, E. Z., G. A. Morelli and S. Winn. 1987. Multiple Caretaking of Efe (Pygmy) Infants, *American Anthropologist* 89(1): 96–106.

Tronick, E., G. Morelli and P. Ivey. 1992. The Efe Forager Infant and Toddler's Pattern of Social Relationships: Multiple and Simultaneous, *Developmental Psychology* 28(4): 568–577.

Yasuoka, H. 2006. Long-Term Foraging Expeditions (*Molongo*) among the Baka Hunter-Gatherers in the Northwestern Congo Basin, with Special Reference to the Wild Yam Question. *Human Ecology* 34(2): 275–296.

高田　明．2012.「親密な関係の形成と環境―ナミビア北中部のクン・サンにおける養育者 – 子ども間相互行為の分析から」西真如・木村周平・速水洋子編『講座生存基盤論 第 3 巻 人間圏の再構築―熱帯社会の潜在力』京都大学学術出版会，23–51.

山内太郎．2022.「狩猟採集民の子どもはどのようにして大人になるのか―育児協働と子どもの狩猟採集活動」河合香吏編『関わる・認める』京都大学学術出版会，63–93.

服部志帆．2004.「自然保護計画と狩猟採集民の生活―カメルーン東部州熱帯雨林におけるバカ・ピグミーの例から」『エコソフィア』13: 113–127.

**Web サイト**

Cambridge Dictionary.〈https://dictionary.cambridge.org/ja/〉（2022 年 1 月 29 日最終閲覧）